

# 岡山県現存最古の 水力発電所——入発電所——

明治十一年（一八七八）、東京の電信中央局開設の祝賀会場において、国内初の電燈（アーケ燈）が点燈されました。それ以来電気は明治政府の掲げる殖産興業・富国強兵政策を大きく進展させる重要な動力源として需要が増大し、各地で電力会社が設立されていきます。

岡山県では、明治二十七年（一八九四）五月に、現在の岡山市内に火力発電によって電燈が燈されたの

が最初ですが、これに後れること十二年後の明治三十九年（一九〇六）、美作地方でもついに津山電気株式会社という電力会社が設立され、明治四十三年（一九一〇）には美作地方初の水力発電所が井坂に建設され稼働しました。

吉井川水系では、その後井坂発電所に次いで大正五年（一九一六）に羽出発電所が完成し、その次に建設されたのが入発電所です。

大正七年、下田邑（現津山市）の実業家・政治家で当時美作の電力事業に力を注いでいた土居通憲は、中谷村に出力七〇〇kwの水力発電所を設け、カーバイドなどの電化工業品の製造販売を計画し、山陽電化工業株式会社を設立しました。しかし第一次世界大戦の影響によりカーバイドの価格が暴落、経営が困難になったため電力供給事業に方向転換し、大正八年に政府の許可を受けました。発電所の建設にあたっては、水利問題で地域の人々の強力な反対に遭い、当初の計画を大幅に変更し、水利に影響のない久田村久田下原の国原井堰より取水し、吉井川左岸をトンネル等で送水し、小田村塚谷を経由して発電所に水を引くことになりました。そして大正九年四月、社名を吉井川電力株式会社と変え、五月より発電所の運転が開始されました。これが入発電所建設の経緯です。

入発電所の電力は、備作電気株式会社や金川電気株式会社など県南へ電気を供給する電力会社へも供電していました。大正一〇年に備作電気が建設した久田発電所が営業運転を始めると備作電気への発電を中止し、翌年には中谷村・小田村・郷

村の一部への電気の供給を開始しました。

その後、昭和初期頃に県道付替え工事に伴い取水口を久田下原平床に設け、新導水路を構築、昭和一〇年には出力を一六〇〇kwに増加しました。その間、そしてその後も電力会社は次々と吸収・合併を重ね、昭和二十六年（一九五一）中国電力株式会社が発足して以降、中国電力の所管する施設として現在に至ります。

入発電所は、苦田ダム建設中は一時運転を休止していましたが、ダム完成後は運転を再開しており、現在岡山県内の現存する水力発電所としては最も古い発電所になります。

平成十八年（二〇〇六）には、貴重な産業遺産として発電所建物（本館）、水槽、鉄管路擁壁及び本館擁壁が国の登録文化財となりました。

普段は何気なく見ている入発電所ですが、実は日本の近代化の一翼を担った県内最古の施設であるという目で見れば、今までは違った趣で見えてくるのではないのでしょうか。

参考資料：『みまさかの電気の歴史』『奥津町史』『岡山県歴史人物事典』中国電力HP

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733



入発電所（入）



入発電所導水トンネル（塚谷）



入発電所水路（塚谷）